

## ワークショップ要旨：現代のオントロジーとその源流

倉田 剛（九州国際大学）

現代オントロジーのなかで扱われる主題の多くは 19 世紀後半から 20 世紀初頭のオーストリアで活動した哲学者たちによって確立された。幾つかの事例を挙げるとすれば、(1) ブレンターノ学派の哲学者たちは、ボルツァーノの影響のもと、「事態」という存在論的カテゴリーをはじめて明示的に論じ、また(2) 現代オントロジストたちが「トローブ」と呼ぶカテゴリーに関しても先駆的な業績をのこした。さらに(3) マイノグおよびグラーツ学派の「対象論」は、非存在者を扱う現代の意味論・存在論に少なからぬインスピレーションを与え続けており、(4) フッサールの仕事は、現代のフォーマル・オントロジーの源泉の一つとして評価されている。

それだけではない。この時期のオーストリア哲学の影響は広範囲におよぶ。ブレンターノ学派の哲学者トワルドフスキは、ポーランドにおいて多くの弟子たちを輩出し、(5) なかでもレスニエフスキはフッサールと並ぶメレオロジー（「全体と部分に関する一般理論」）の創始者となり、(6) トワルドフスキ門下のコタルビニスキに学んだタルスキはモデル論を生み出すことになる。

本ワークショップは「現代オントロジーの最大の源流は 19 世紀後半から 20 世紀初頭のオーストリアに存する」というテーゼのもと、現代の諸議論を、いわゆる「分析形而上学」の枠内に閉じ込めるのではなく、より広範な哲学史的観点から捉えかえそうとする試みである。